

## 第4回地震火山こどもサマースクール「活火山富士のひみつ」

### Secrets of the active volcano Fuji: The 4th Schoolchildren's Summer Course in Seismology and Volcanology

# 小山 真人[1]; 鍵山 恒臣[2]; 中川 和之[3]; 橋本 学[4]; 第4回地震火山こどもサマースクール実行委員会 小山 真人[5]

# Masato Koyama[1]; Tsuneomi Kagiya[2]; Kazuyuki Nakagawa[3]; Manabu Hashimoto[4]; Koyama Masato Executive Committee for the 4th Schoolchildren's Summer Course in Seismology and Volcanology[5]

[1] 静岡大・教育・総合科学; [2] 東大震研; [3] 時事・神戸; [4] 京大・防災; [5] -

[1] DIST, Education, Shizuoka Univ.; [2] Earthquake Research Institute, University of Tokyo; [3] Jiji Press Kobe; [4] DPRI, Kyoto Univ; [5] -

<http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/kodomoss/>

2003年8月2~3日の2日間、静岡県富士市の「富士山こどもの国」などを会場とし、一般から募集した児童生徒を対象として表記のサマースクール(主催:日本火山学会・日本地震学会・静岡県,後援:静岡県教育委員会・国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所,協力:テルモ(株),オシキリイラストレーション)を企画・実施したので報告する。詳細な情報やスタッフ名簿については<http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/kodomoss/>を参照してほしい。

【歴史と理念】地震火山こどもサマースクールは、地震学会学校教育委員会の初代委員長であった桑原央治(都立大島高校)の呼びかけによって地震学会と火山学会の有志が集まって1999年夏から始められた準恒例行事であり、これまで第1回「丹那断層のひみつ」が静岡県函南町,第2回「有珠山ウォッチング」が北海道壮瞥町・虻田町,第3回「地震火山・世界こどもサミット」が伊豆大島において開催された(上記Webページおよび小山・中川,2002,地震学会予稿集を参照)。この行事の当初からの根本理念は、1)研究の最前線にいる専門家が子どもの視点にまで下りて、地震・火山現象のしくみ・本質を直接語る,2)災害だけでなく、災害と不可分の関係にある自然の大きな恵みを伝える,の2つである(たとえば,桑原,1999,科学)。本行事の他の特徴(課題を与えて考えさせる,チーム対抗ゲーム形式,情報の一方通行でなく対話を保つ等)は、子どもの好奇心を刺激しつつ理念を実現するために培った手段である。理念1)は、ともすれば形式主義・権威主義や誤解,不当な省略等が入り込みやすい学習指導要領や教育現場をバイパスする意味をもち,理念2)は、自然の負の面だけへの対決姿勢を強要し,自然理解や共生の視点を欠いた従来の防災教育の不完全性と限界に対するアンチテーゼとしての意味と役割を担っている(小山・中川,2002)。参加者へのこれまでのアンケート結果も上々である(佐藤ほか,2000,2002,合同学会予稿集)。

【企画経緯・運営形態】第1~3回のサマースクールについては、すべて地震学会側からの発案であったのに対し、今回は火山学会側が発案し,地震学会に協力を求めた初めてのケースとなった。火山学会では、これまでと同様に事業委員会の担当行事となった。地震学会では、第3回までを担当した学校教育委員会に代わって,対こども行事を担当する普及行事委員会が今年度から新設されたため,その最初の担当事業となった。また,静岡県に協力要請したところ理解が得られ,静岡県が主催者に入るとともに,県防災局および静岡県地震防災センターの職員が事務局をつとめた。過去3回においても地元自治体の後援や協力が得られていたが,今回はこれまで以上に積極的に地元自治体が運営に関与した点で画期的であり,今後の官学地域連携のあり方をさぐるテストケースとなった点も特筆すべきである。

【行事の概要】募集対象は、主として静岡県内の小学校5年生から高校3年生までの児童生徒とし,募集人員はスタッフのマンパワーとバス座席の制限によって40名とした。実際には,今回は高校生は参加せず,小学生17名+中学生8名の計25名が参加した。そのうち静岡県内からの参加者は23名,県外からの参加者は2名であった。募集の広報には静岡県および静岡県教育委員会の広報媒体を用い,地元新聞にも案内を掲載した。運営費用は両学会が20万円ずつ用意したほか,静岡県が講師謝金の形で費用の一部を負担した。また,宿泊・食事代,実験材料費,テキスト代,傷害保険料,有料道路料金などの実費として,参加者1名につき参加費6000円を集めた(実際にかかった上記実費は,募集定員に満たなかったこともあって約1万3500円/人であったが,高額過ぎるとの配慮により6000円にとどめた)。移動の足となったマイクロバスと先導車は静岡県から無償貸与を受けた。プログラムの概略は以下の通りである。

第1日目 08:30 新富士駅および富士駅で参加受付

10:00 富士山こどもの国で開講式、チーム分け、オリエンテーション

11:30 太郎坊での宝永噴火堆積物,および日本ランド付近での溶岩流観察

14:00 富士山こどもの国で,食材を使った火山噴火の実験2種(小麦粉ときな粉を用いた溶岩流出・火山体形成実験,およびゼラチンとラー油を用いたマグマ貫入・割れ目噴火実験)

16:30 実験のまとめの講義

19：00 地震・活断層・津波に関する講義

第2日目 08：00 富士山こどもの国を出発

10：00 宝永火口付近での地形・地質観察

12：20 水ヶ塚・吉原観測点で地震・地殻変動観測についての観察と解説

13：30 噴火予知，ハザードマップ，火山の恵みについての講義

14：45 チームごとの学習課題発表と講評

15：30 修了証書授与式

17：00 バスで富士駅、新富士駅に移動の後、解散